大阪はつながっていく

文＝柴崎友香
Shibasaki Tomoka

画＝浅妻健司

わたしが子供のころによく行っていた公園の片隅には、「近代紡績工業発祥の地」の石碑があった。明治の半ばに、大阪紡績会社がここで操業し、大阪の紡績工業を支える基盤となった。もっとも、中華鍋を傾けたような形の滑り台で遊んでいた当時は、そんな歴史も石碑があることも知らなかったのだが。

紡績工場が発展を続けていた時代、大阪は「東洋のマンチェスター」と呼ばれていた。もしくは、呼ばれようとしていた。「煙の都」とも形容されていた（当時の「煙」は誉め言葉である）。現代の大阪の街の形は、そのころに作られた。

今年の2月、日本文学を紹介するイベントに参加するため、初めてイギリスを訪れた。ロンドンの翌日、特急列車で2時間半のマンチェスターでもイベントがあった。熱狂的なファンのいるサッカーチームとロックバンドのストーン・ローゼズやオアシスのイメージくらいしかなかったのだが、駅からホテルに移動するタクシーのほんの5分の道程でビクトリア時代の栄華を今に伝える街の風景に圧倒された。

煉瓦造りの豪奢な建物がずらりと並ぶ。それも8階建てや10階建てが多く、前日までいたロンドンに比べても迫力があった。市庁舎はまるでゴシック教会のようで、内部は床、壁、天井、窓枠、ドアノブと、これ以上意匠を凝らす場所がないというほど壮麗な装飾が施されていた。隣には巨大なドーム型の閲覧室を中心にした図書館。19世紀、いかにこの街が世界の中で繁栄を誇っていたかを、そして大阪が東洋のマンチェスターに憧れ、目指したことの意味を、やっと心底理解できた。

外国を旅行していると、大阪みたいやな、と思うことが度々ある。

ニューヨークのマンハッタンの碁盤の目の区画や一方通行が交互に定められているまっすぐな道路も大阪を思い出したが、街のハード面よりも、やはり人と距離に対して感じることが多い。ニューヨークのメトロポリタン劇場でチケットの列に並んでいたら、後ろのおばあさんがわたしの携帯の待ち受け画面を見て、猫が好きなのか、うちには2匹いる、と話しかけてきた。エレベーターや信号待ちのわずかな時間にも、見知らぬ人となにかしら話すことは何度もあった。

わたしが商店街のそばで育ち、家は自営業、自転車で15分ほど走れば難波のど真ん中という環境だったせいもあるが、とりわけ、市場的な場所に行くと、大阪っぽいと思う。ホーチミンの公設市場のごちゃごちゃとした活気や店のおばちゃんの愛想とちょっと強引なくらいの売り込み。台北（タイペイ）の古くから続く問屋街、永康街には大阪の船場センタービルにそっくりな布問屋のビルがあった。売っている布もヒョウ柄にヒョウの顔で、店の人が大阪弁でないのが不思議なくらいだった。

東京に住んで10年が過ぎた。大阪に戻ってきたと実感するのは、新大阪からJR京都線や地下鉄御堂筋線に乗り換えた瞬間である。

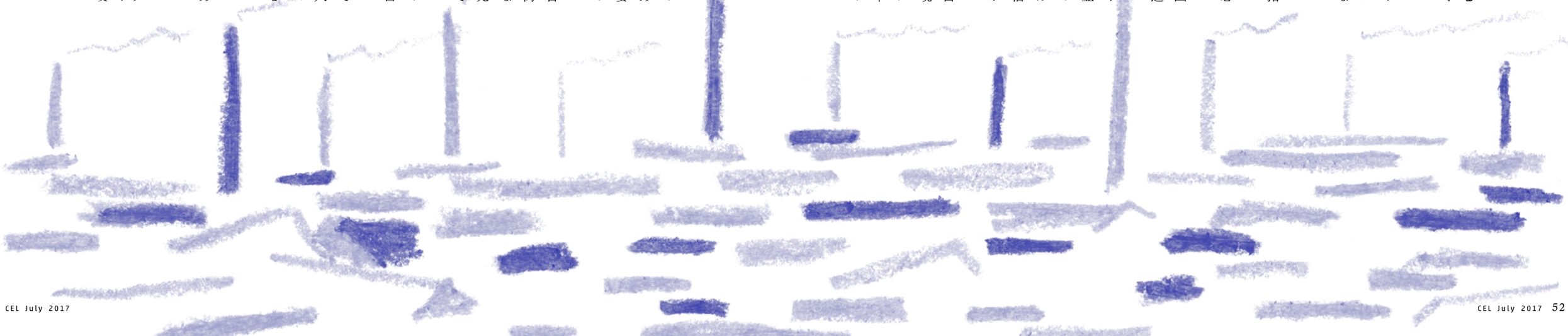
車両に入った途端、人の話し声があちこちから耳に飛び込んでくる。その独特の抑揚のせいなのか、明るい色彩の個性的な服装のせいなのか、なんというか、人の輪郭がくっきりしているように感じる。仕事で出会う人も、長い付き合いの友人も、その知り合いで初めて会った人も、たいてい興味深いことを率直に話してくれる。

「東洋のマンチェスター」だったころに造られ、今も数多く残る近代建築も、学校や庁舎などの公共施設や大企業だけではなく、大阪の場合は、個人オーナーの個性的な建物が多い。

大阪を象徴する建物の一つである中央公会堂は、たった一人の実業家が莫大な寄付をして造られた。一時は老朽化で取り壊しの話もあったが、地盤改良までしてよみがえった。高校の合唱大会や咲くやこの花賞の授賞式もここだったので、個人的にも思い入れが深い場所である。

この数十年、大阪はメディアで喧伝されるイメージに自身が縛られてきたように思う。さわがしい、がめつい、などのマイナスのイメージであっても、大阪の人はサービス精神が旺盛なので、その場の期待に応えて、大げさに振る舞ってしまうのである。そうしているうちに、それが本来の自分の姿であると思い込んでしまっているところがあるのではないか、と感じる。

2年前にオープンしたあべのハルカスの展望台からは、上町台地を中心に発展してきた大阪の街と歴史が一望できる。どこに行っても似たようなものだとたいして期待もせずに上ったわたしの先入観を打ち砕いて、まるで空中に浮かんだ感覚で何時間でも過ごせそうなこの展望台から眺めると、はるかに大陸から海を渡ってきた人や文化がこの場所を交点として古代から行きかっていたのが目に浮かんできた。

一極集中や経済の停滞など厳しい環境が続いているが、いきなり「東洋のマンチェスター」と大きく打って出た大阪の人の柔軟さはまだ健在だ。現代は当時のようにがむしゃらに規模を拡大するのではなく、街だとか国だとかいう枠を超えて、フラットにいろんな人や場所とコミュニケーションを取れる、おもしろいことができる可能性がある街だと、わたしは思っている。

しばさき・ともか　1973年、大阪府生まれ。生まれ育った大阪を舞台にした小説を数多く執筆。2007年、『その街の今は』で芸術選奨文部科学大臣新人賞、織田作之助賞、咲くやこの花賞を受賞。10年、『寝ても覚めても』で野間文芸新人賞受賞。14年、『春の庭』で芥川龍之介賞受賞。